

円地文子全集

第十三卷

田 地 文 子 全 集

第 十 三 卷

新 潮 社





第七回配本(全十六巻)

円地文子全集 第十三巻

定価三三〇〇円

昭和五十三年三月十五日 印刷
昭和五十三年三月二十日 発行

著 者 円地文子 © Fumiko Enchi, Printed in Japan 1978.

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号一六二 東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部 東京(〇三)二六六一五一
編集部 東京(〇三)二六六一五四一一

振替 東京四一八〇八番

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 神田加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。
送料小社負担にてお取替えます。

円地文子全集 第十三卷 目次

小町変相

なまみこ物語

彩霧

解題

7

115

215

415

円地文子全集 第十三卷

小町 変相

第一章

花の色

後宮麗子はベッドの中でうつらうつらしていた。一度ふっと眼を見開いて、カーテンの裂け目から明るい光の忍びこんでいるのを見さだめた後なのでほんとうに眠っているわけではなかったが、身体中の節々がとろけて骨なしになつたようなげだるさが不思議に快く、大海の波にゆすられて浮身しているように両手を投げ出したまま淡い眠りにいつまでも身を委せていたかった。

そうだ、今日は芝居はもうなかったのだと思った。昨夜、混成劇団の千秋楽の後、お別れパーティだと言うことで、柳橋の「出雲」に行き、男女合せて二、三十人が深夜まで

騒いでいた大川べりの座敷のざわめきがふっと浮び上つて来るかと思うと、それに重なるように真白いベッドの中に眠り姫のように横たわって「アルマン」「アルマン」と細い声で男の名を呼びつづけている椿姫が、そのまま自分であるような夢うつつの錯覚に他愛なくさまよって行つた。

意識を朦朧と霞ませている幾重もの紗幕の底に、何となく重たく沈みこんで溶けない異物がある。はて、これは何だつたらうと麗子は覚めきらないままに、恰もそのあたりに重たい塊りがあるかのように片手をゆっくり胸の上に乗せた。

劇場一ぱいに湧き溢れる旺んな拍手喝采の騒音がゆっくり滑り落ちた厚い緞帳を越えて、劇の終った殺風景な舞台に答えを求めて来る。今し方、臨終の悲劇に涙をしばらくせた椿姫が青い隈取りの扮装のまま床からはね起きて、裳裾をつまみ、アルマンと手をつないで舞台の中央に立つ……幕がもう一度上るとわれ返る拍手の波……

いや、これではないと麗子は首を振った。一つの芝居の

主役を勤めていても、日によって演技のうまく行かないこともあるし、見物の調子のびったり来ない日もある……しかし、昨日の最終の幕はどっちも調子が出て、役者冥利、心のゆく劇の盛り上り方だった……すると、この胸の底の沈澱物……それが所謂「寝ざめの悪さ」というものであることを、麗子はこの数年ようやくうなずくようになっていたが……はその後に心にしのび入った曲者に違いない。

寝ざめの悪いと言う言葉を、多くは他人に対して、非情な行為をした後味のようにいうけれども、麗子にはその実感はむしろ外から自分を冒して来るものの理不尽な圧力に抵抗する怨みや呪いの闘いであった。その嫉妬や呪詛は、心の奥所からじわじわと湧き出して来て、寝ざめ方の夢うつつの間に麗子の弾力のうせた乳房の間を、幽霊の手のように冷たく撫でまわすだけで、いつも捌け口を見出さぬままに、呑みこまれて行くのであった。

あ、あの時の……と麗子は口の中でつぶやいた。

眼の前に薄樺色の腹側をふくらせ、化粧塩をほどよく焦がして尾鰭をぴんとはね上げた鮎の塩焼きがあった。

「いい匂いですね。こんな香気の強い鮎は今年はじめてだ……」

麗子の隣にいた新派の老け役の須坂が食通らしくうれしそうに眼を細めて麗子に言い、近くにいた「出雲」の女将

の梅乃に声をかけた。

「梅乃さん、これ……どこ？ 長良川？」

「いいえ、周山なんですよ」と梅乃が答えた。

「周山っていうと、あの京都から若狭の方へ行く……」

「ええ、ええ、周山街道、あの辺の川で捕れるのが苔の工合ですかしら、大層匂いがよくっておいしいって評判なんで、取りよせてますの……尤も毎日とは行きませんけど、今夜のは飛行機で夕方届いたんですわ」

梅乃は昔女優だった時代からの顔馴染みなので、劇界のお客には改った口はきかなかった。それだけに梅乃の経営している「出雲」はわがままがきくので芸能関係の会合が多いのである。

「そうですか。私もよく京都に行くと鮎を食うけれど、周山の鮎ってのははじめてだ」

須坂がそう言ったのを皮切りにあっちでもこっちでも、鮎の匂いが芳しいとか味がこまかいとかいう讚め言葉で一しきり座が賑わった。麗子も勿論その会話に加わって、周山の鮎の濃い風味を賞美してみせたが、実際には麗子の嗅覚にはその水苔の匂いの鼻をつく芳しさは、ほんの仄かにしか漂って来なかったのである。麗子はこの一兩年、匂いについて感覚が急に鈍くなったのを時々気づいていたが、人に話したことはなかった。耳や眼のうとくなるのと違っ

て、實際それはごまかしい種類の老衰であつたが、今夜のように鮎の香気の快く鼻を打って来ない不快さにはまだ出あつたことがなかった。

口数の多い都会育ちの集りだけに、鮎の匂いのよさを珍重する声がいくらか大袈裟にざわめき立つ中に交つて、同じようなほめ言葉を上手に口にしてゐるだけに、その時麗子にはしみじみ、食道楽の自分から、又一つ鮎という季節魚の醍醐味が奪い取られて行く無慈悲さが身にしてみてわびしく感じられた。

「そうそう……それだけじゃないわ……まだあとがあつた……」

麗子は今度こそもうすっかり覚めきつた眼を見開いて、ひとりごとを言った。

同じ宴会で、もう大分席が乱れ、上戸の癖の出るころであつた。来年の今頃にもこういう組合せで又芝居をやろう、それには皆のスケジュールも早くにきき合せ、出し物にも一工夫なくてはなるまいと歌舞伎の立者の紅車が言い出したのははじまりで、本氣と冗談をからみ合せたようなこの社会独特の話術で、いろいろな思ひつきの出る中に言い出しの紅車が、

「どうだい、いっそ、後宮さんの小野小町でわれわれを六歌仙というお見立てのドラマを誰かに書いて貰っちゃあ」と何気なしに言つてのけた。

「後宮さんの小町はいいが、まさか、僕たちが大和屋さんや音羽屋さんの真似をして清元や長唄の地とことんやらされるわけじゃありませんまいね」

新劇の二枚目でこの芝居でアルマンを勤めた松山という俳優が言った。

「いやものの例えですよ。まさか六歌仙をそのまま……」と紅車はそこまで言つて、氣を変えたと、

「しかし後宮さんの小町というのは悪くないな。私は子役時分に前の沢瀉屋の『通小町』っていう新舞踊を見たが、よかったなあ……後宮さん一つ、誰かに新しく書いて貰つて、小町をやりませんか」

と麗子の方を向いて言つた。

「そうね、私も随分日本の歴史で有名な女の人を勤めてゐるけれども小町はまだしたことがないわ。そうそう子供の時分に踊の温習ユヅシ会に、関ノ扉の小町姫をやつたことがあるきりよ」

「小町って一体何です」

と向う側の少し離れたところにいた、やつぱり新劇出の若いテレビ男優が言つた。

「小町って小野小町さ。有名な美人で歌詠みだよ」

「そりゃ知つてますよ。昔は何とか小町って言えばその辺で評判の美人のことをいったんでしょ」

「そうだよ。つまり今のミス何々と同じさ」

と松山が言った。

「そりゃ知っているけれども一つ小町っていうと、ある符牒フイロに使いますね。ありゃ何か謂れのあることですか」

「なるほどね」

松山も紅車も、ちょっと鼻白らんで曖昧にうなずいただけだったが、須坂は平気な顔で、

「小町っていうのは女の形をしていて、女じゃあない、つまり穴なしのことを言うんだよ。あんたのサインというのはそのことだろう」

といった。

「そうです」

と問いを出した男の方が、今度は同席の女たちを憚って渋面を作った。

「その小町の謂れがわからないというの……そんなら教えて上げよう……ちょっと、横町の隠居というところだね」

須坂は酒の入っている高調子で話し出した。

「先刻、紅車さんのお話にあった『通小町』ね、あれが即ち小町の異名の元だよ。深草少将というのが小町の美人なのに惚れて言いよるけれども、歌ではかりうまいことを言っていて、一向承知しない、お終いにそのお言葉が真実なら、百日の間夜毎に通って来て下さい。百夜目には必ず一つになりましようと言ったので少将は毎夜毎夜、雨の夜も

嵐の夜も通いつづけて九十九日という晩に雪に凍えて、死んでしまったというのだ。男にそんな思いをさせるほど情の剛かったという小町は、恐らくほんとうの女ではあるまい。あれは穴なしだったに違いないというのが世間の人の推測さ、男をあやなしてばかりいて、たのしませなかった報いで小町は婆さんになってから、おちぶれて乞食をして歩いたということだ」

「それが卒都婆小町っていうのね」

と女優の一人が符牒から話の外れたのにほっとして言った。

「私、暇があればお能をみることにしているけれど、卒都婆小町も関寺小町も一度も見たことがないんです。卒都婆小町は殊に重い曲なんですってね」

「私は戦争の最中に、水道橋の能楽堂で、桜間弓川さんの卒都婆を拝見しましたよ」

と梅乃が言った。

「私にはお能はわからないんだけど、亡くなった主人に連れて行かれてね、笠をかむって出て来たところのよかったこと……あの姿がまだ眼に残っているわ」

梅乃ははるかなものを見やるような眼つきになった。麗子にはその眼が変に若々しく厭らしく映った。

「後宮さん、ほんとうに一度小町の一代記をやって御覧なさいよ。あなたならきっと若いところから晩年まで見事に

演りこなせるわ」

梅乃が何げなくそういった時、少し離れたところにいた演出者の風早が酔った声で、

「そいつはおもしろいや。後宮さんの小町なら脚本^{ほん}は是非信楽高見に書いて貰うんだね」

と言った。

一同はそこで又がやが言ったが、妙に弾まない調子で何となく他の話に焦点がうつって行った。麗子の内に先刻からじわじわ蒸れて来ていた不快さがはっきりした凝り^{こり}になったのは、その時であった。

小町の異名の話が若いテレビ俳優の口から出て、須坂の滑っこい舌に乗り出したところから、麗子は須坂が自分に当てつけているとはゆめにも思わないのに、強いて一座の者が自分を揶揄しているような錯覚をつくり出していった。

若い時代に美貌と才能をたのんで、言いよる男の数々をなまめかしい歌の手管であやなし、自分の誇りを満足させるだけで、男の側に女を愛す欲びをついに一度も与えなかったという小町も昔の自分に満更、縁のないことはないが、それ以上に数年前女だけの疾む癌に取りつかれて、子宮を全部えぐり取ってしまった麗子にとっては小町の名が性的不能の符牒に使われ、一種の嘲笑の対象になっているのが、他事に聞き過せない屈辱感であった。

喋り散らしている男達は兎も角として、黠なくとも梅乃

だけは小町の話の出たときから、意地悪くそのことに気づきほくそ笑んでいると思われるだけに、真実らしく眸を鍾^{かね}めていう梅乃の言葉は麗子の心に深い爪痕を残した。

「そう言えばあの人、この頃ばかりに若返っているわ」

麗子はそうつぶやいた時、もうするりとベッドをぬけ出して、朱色の派手なカーテンをひきあげた。

外には埃っぽく白んだコンクリートの道と大小の箱のような殺風景な鉄筋建築の向うに、神宮内苑の森がそこだけ木深く眺められた。

麗子がそこに行ったのは勿論外を見る為ではなく、窓際にある豪華な三面鏡に寝ざめの素顔を映して見る為であった。可愛らしい小鳥と花模様のゴブラン織のストールに低く腰を降ろし、麗子は銀張りのフランス製の手鏡をとって、舞台人らしい細心な瞳を鏡の中に集中した。

崩れはじめた黄薔薇の花弁のように緻密なきめがそのまま潤いを失って縮みかけた皮膚がまずだるそうに眼に入った。皺は額にも薄く見えるが、何といても一番眼につくのは明眸を養まれた大きくゆったりきれた二重脣の周囲で、眸には今猶ほを語るにふさわしい若々しい艶がなまめいているだけに、化粧をしない素顔の上脣と眼尻を無慚に切り彫んでいる皺と下脣の縁の不自然な袋型のむくみは調和のとれない醜さを露出している。小鼻の両側に見える窪みはまだ、老人皺とまでは行かないが、玉子型に、形よく彫ま

れて小さい頤へきつちりはまりこんで行く筈の頬にも、正確かな凹凸が出来て、唇の端と頬の境が布団を糸で綴じたように奇妙にくくれている。

それでも顔の頤廢は首筋のそれに較べればまだ蔽いかくせないほどではなかった。麗子はうす紫のネグリジェから脱け出した長い首を、思い切りのばして、手鏡の手をゆっくりうしろ横にまわしてかざすと、三面鏡の一面が外の光を受けて白く輝いている面に、大きい鶴のように見事な首をのばした斜め後ろ向きの半身像がうつった。

残念なことに、この鶴は老いていた。立派な長い首ではあったが、もうその上は毛はぬけ落ちて灰褐色の斑立ちまだを見せている……まさか、麗子の皮膚は灰色にしなびてはいなかったが、耳朶のうしろから頤の根まで一本通っている筋肉が首をのばすにつれて、恐ろしく太い強さにひきのびてその周囲の皮膚の弾力を失った萎み方をあざわらうように見える。麗子はもう一層自分の肉体の衰頤を残酷に見極めようとするように、思いきり上向けた頤の前につきつけるように鏡を据えて、下眼遣いに、小さく丸い頤の下、水の足りない氷囊のようにたるみのあらわな皮膚を見つめた。

ああ、私も衰えたものだ、もうこれから幾年舞台に立つて、美しいと見物に思いこませることが出来るだろう。芸の力もさることながら、舞台俳優は肉体で直かに観客と対

い合う職業であってみれば、老人の能樂師が皺だらけの首を露わにしたまま、美女の面をかけて、客を魅了するようになわけには行かない。勿論舞台にも約束ごとはあるが、その約束ごととは俳優の肉体の衰頤を全部蔽いかくせるほど強力なものではない。まして女優の場合には、歌舞伎の女形のように初めから男が自分の性を埋没させるという不自然な約束ごとを逆に魅力化している場合とは違って、女の肉体の魅力が直かに見物を惹きつけると同時に、その衰えを見物が見透かすことも無情に残忍でさへある。

麗子はそのことを知っているだけに、花ざかりの長さを不思議がられた舞台生活の間に、殆ど素顔の喜怒哀楽を取り落して来た悔いを、この頃になって感じないではいられなかった。

結婚を望んだ男も数多くあったが、それ以外にも、舞台生活を損わないままにパトロンになりたいと懇望された高名な貴族や実業家、政治家、画家なども何人かあった。その中には麗子の方でも驕きよりたい人柄も幾人かあったが、舞台の人気と言うよりも言わば押し返し、巻きかえす人の勢いに乗って足をさらわれまい、負けまいと、気を張っている中に身体にも心にも暇がなく、いつか恋愛や情事は舞台の上に預けたままになってしまった。

唯一度、梅乃が後に結婚した出雲路正吾とは人眼を忍ぶ仲になったことがあった。正吾は料亭「出雲」の息子だっ

たが、由緒ある客筋の落し胤を養子にしたのだという噂で、そのせいか稼業は継がず畠山の病理学を専攻して、伝染病研究所に通っていた。麗子は正吾と愛しあった時、結婚してもいいと思ったが、舞台を捨てる気はなかったし、正吾も麗子を「出雲」の女将にしたいとは思わなかった。そんな関係が一年あまりつづいてる中に、麗子の周囲はこの恋愛関係を嗅ぎつけて警戒しはじめたし、正吾の養母も「出雲」の後継者としてなら兎も角、麗子を妻にすることは、正吾の学生生活には似合わないと言言するようになった。事実戦前の社会では、研究者と女優の取合せはまず女優がその職業を捨てない限り長くつづくものとは思われなかったのである。

正吾にも「出雲」の養子としての地位に未練はなかったが、少女時代から舞台専門に押し通して来た麗子が地味な研究者の生活に似合わないことは解っていた。麗子にしても、人気盛りの芸を捨て、周囲の反対を押し切ってまで、正吾と一緒に居る覚悟はなかなかつかない。

その両方のジレンマの言わば盲点を利用したのが梅乃であったと言え、梅乃を悪く言いすぎることになるだろう。

梅乃もその当時、麗子ほどのはなやかな人気はなくても、同じ劇団で特長のある芸風を買われて、可成り重用されていた女優であった。少しつむじ曲りの批評家や、見巧者に

は、容貌も芸質も派手な麗子に難をつける為のように梅乃をほめる者が可成りあった。

「器量や柄から言えば、麗子と、梅乃じゃ較べものにならない……しかし、あのそつぽの悪さで柄も貧弱な梅乃が、時によると、麗子より光るんだから……芸というものは面白いよ」

とそういうつむじ曲りは言った。

しかし梅乃とすれば、芸がうまいと千度ほめられるよりも麗子の思まれた容姿や美しい張りのある声、巧まないでもなまめかしい情緒を醸し出す挽やかな姿などを一日でも自分のものに出来たらどれほど仕合せだろうと、渴くように羨まない日は一日としてなかった。

言わば梅乃の眼ざましいほどの芸の進歩は麗子の天成の資質に対する劣等感が拍車をかけた結果のようなものであった。

梅乃は背が低く、肩が怒っていて顔は額の両側が落ち、頬が短くて、貧相な猫のようであった。口の悪い楽屋雀は梅乃の渾名を泥棒猫とつけていた。その泥棒猫に、旅興行で三ヵ月ほど東京をあけた間に麗子はものの見事に、出雲路正吾をさらわれたのである。

舞台の上の恋愛や情事には数がかかっている、男女関係の機微に通じていない麗子には、正吾が自分と別れるのは仕方がないにしてもどうして同じ女優仲間の、事もあろ

うに梅乃のような不器量な女を愛すようになり、結婚にまで踏みきったかを理解することが出来なかった。

自分に対する当てつけという風に考えてみても、麗子の知っている正吾はそんなシューゲームを好む気質とは縁がなかった。恋愛なんて面倒臭くなったというのが本音だと正吾の口から説明されて、麗子はいくらか納得したが、その面倒くさくなった正吾をうまく手懐けて、梅乃が彼の妻と、「出雲」の若女将との二役を見事に射とめることになったのには、正吾の養母が背後で糸を引いていたのであった。美貌ではないが、努力型の芯の強い梅乃の舞台にはじめから惚れこんでいた養母は、梅乃が長い間年期奉公のような徒弟的な苦勞を積んでやっと世間に認められるようになった舞台を惜しげもなく捨てて、正吾の妻になり度い……いや、隠れた愛人の身分でもいいからあの人に愛されたいと願う烈しい願望に撃たれた……いや、撃たれたというのは養母と梅乃と二人の間で当人達も半ば無意識に仕組んだ大芝居で、正吾自身もその芝居を半分は知っていて、一役買ったのがほんとうのところだったかも知れない。

いずれにしても、この恋愛合戦は、人気盛りの美貌を誇りにしていた麗子の敗北に終ったことは事実であった。勿論、麗子の周囲も出雲路の側もそのことは秘し隠して通したから、ほんの内輪の数人の他は正吾と麗子との恋愛について知っているものはなかった。

麗子は梅乃の引退興行にも附合い、結婚の祝いものも派手にしてその後三十年近い月日の間、表面美しく附合いつづけて来たが、出雲路正吾が梅乃との間に二人の子供を残して、終戦直後に病死してしまった後も、陰險な泥棒猫として梅乃を憎む気持は絶えずに持ちつづけて来た。

「出雲」の柳橋の店も戦災で焼けたが、一年経たぬ中に梅乃は帰って来て、バラック建てで、一膳飯屋同様に店を出し、やがて、戦前に最良だった客たちが政界や実業界に帰り咲きはじめてのを後援にして、金を借りたり、権利を取って貰ったりして、四、五年の後には元の建築と劣らない料亭に建て直していた。夫の死の他にすっかり者の姑をも、その二、三年の間に見おくっていたから、花柳界と手を組んで、そこまで来るには梅乃は一方ならぬ働きをつづけて来たわけである。お前を正吾のお上さんに貰ったのは出雲路の家の仕合せだったよ、と姑は臨終近い床で梅乃の手を握って言ったそうである。

梅乃は子供にも恵まれていて、男の子は城北大学の国文科を出て、その研究室の助手になっているし、女の子は母親の血をうけて、テレビ女優になっていた。麗子も、出雲路豊美という梅乃の娘にはテレビへ出演した時に一度顔を合せたことがあったが、梅乃とは似ず近代的な美貌で背も高く、肉体的には梅乃の充たされなかったものを全部埋め合せているような娘だった。